西芳寺洪隠山枯山水の作者及びその作庭年代について

梅 沢 篤 之 介*

Atsunosuke UMEZAWA : Study on a Waterless

Garden or Kare-Sansui (I)

On the Authorship of 'Karesansui' Gardn at Koin-zan, Saiho-ji, Kyoto

はじめに

洪隠山西芳寺庭園は、数多い京都の庭園の中でも名園の一つとされ、庭に生えた苔により苔寺とも云われている。

この寺は天武天皇天平年中に行基と云う僧の開山と云われ、暦応二年(1340)四月藤原親秀の勧誘により、夢窓国師が住した。庭園はその後、国師により作庭されたか、或は改造されたと考えられているが、文献によつて知り得る庭園のさまは、国師が住した暦応二年以後である。

西芳寺庭園の一部をなす洪隠山中腹に、枯山水と称せられる石組があり、枯滝と考証されている。この石組は西芳寺庭園の作者と考えられている夢窓国師によつて組まれ、大徳寺塔頭大仙院庭園、竜安寺庭園のような枯山水庭園は、この枯滝から発達したと云うのが定説となっている。

洪隠山枯山水の学説

ここでこの定説を裏付けているいくつかの学説を紹介してみよう。

森蒔氏は『日本の庭園』(創元社)に

黄金池を中心とした部分に対し、背後の傾斜地の地形を利用した枯山水様の石組が有名である。石組の間には、元指東庵その他の庭園建築があつた。その登り口に当る向上関からの通路は、飛石、または霰こぼし風の畳石であつたらしく、その僅かに一部が今日現れている。上段の庭園を構成する石組は実に素晴らしいもので、指東庵跡附近から竜淵水、座禅石に至る剛健なる石組をみつめていると、今日なお、作者夢窓国師の旺盛な造型精神にふれる事ができるようである。蔭涼軒日録その他の記録によると、義政は西芳寺の庭園を非常に愛好し、季節ごとにしばしば来訪した事が記録されているが、主に園池に舟を浮べ、黄金池畔の庭園建築に至つて、雅遊を行つた程度で、背後の山に登り、その石組を鑑賞することは少なかつた。また庭園建築が東山殿に模倣されたとしても、背後の石組までをそっくり模写するに至つていない所を見ると、この石組を模倣したくても、それほど、達者に石を組むこ

とが出来た技術者は既にいなかったがためであろう。と記し、その石組を高く評価しておられる。

吉永義信氏は『日本の庭園』(至文堂)に

指東庵東側の山腹にある一群の石組は、枯山水と云われているが、その石組が普通に用いられる意味の枯山水であるかどうかはしばらくおき、この庭園の石組でもつともすぐれている、ゆるやかな傾斜面に多数の庭石を、投げ出したかのような無造作にみえる石組であつて、みじんも技巧的なところがなく、慈照寺(銀閣)寺庭園や桂離宮庭園の石組のように洗煉されていない。だが、鑑賞する人に力強くさせる迫力を持っている。夢窓国師のごとき禅の真髓に徹した、名僧の手によつてのみなした石組であつて、他人の容易に追従を許さない石組である。これは庭園の他の石組についても云えることで、指東庵南側下の一群の石組黄金池西側の影向石を中心とした石組なども、また、同じような構成と表現とを持っている。

と述べておられる。

さらに、西村貞氏は『庭と茶室』の中に

また洪隠山の傾斜地にかまえた豪宕無双の石組、懸瀑岩をかむ枯山水の庭はまさに世界的景観で、鹿苑日録の著者ではないが、国師の気象凜然として今なお存すると云いたい。

とこの石組を絶讃しておられる。

重森三令氏は『日本庭園史図鑑』鎌倉吉野時代に

今此等枯山水様式を見るに從來枯山水は室町を上らぬものと云う風に見られたのであつたが、本庭園の如くずっと古い時代まで遡ることが出来るのであつて、此等の枯山水様式は大体において禅宗と共に入つて来た、北宋画などの影響の然らしむる処と見るべきである。もとよりこの石組に於ては、仏教伝来当時から既に入っているものであるから、鎌倉時代と見るべきであろう。此等の枯山水庭園が山畔を利用して作庭され、且つて下部亀島の枯山水様式と合体すべき斜線上に地割を限定するあたりは、如何にも当代の様式と考える事が出来るであろう。

以上がこの洪隠山の石組についての主な説であるが、これらの学説の共通するところは、

1. 作者は夢窓国師。
2. 組まれた時代は室町時代或はその以前。

* 龍居庭園研究所 : Tatsui Garden Institute.

3. 枯山水、枯滝である。

4. 傑出した石組である。

であり、これを、学界の定説とする事が出来る。

しかし私は、この説と意見を異にし、

1. 作者は夢窓国師ではない。

2. 組まれたのは江戸時代。

3. 枯山水と云うものの定めが不明確であるため、これを枯山水、枯滝と云えない。

4. ダイナミックな感じを表わそうとしている。

と考えている。次に之を説明してみたい。

視覚による考察

すでに述べたが、西芳寺洪隠山の石組(1図)は夢窓国師の作であるが、天竜寺庭園曹源池石組(2図)も同じく国師の作であり、これも現在定説となっており、私の目にふれた日本庭園に関する書物にはそう記されている。

私には天竜寺と西芳寺の石組をみて両者を同じ作者の手になつたものとは考えられない。

たしかに、天竜寺曹源池中及びその附近の石組は美事なもので、池面に出ている石の形、そのコンポジションのうまさは他に類を見ない。しかしこれを見て西芳寺洪隠山の石組を見ると、どうしても天竜寺池中の石組の作者の組んだ石組とは思えない。

天竜寺曹源池の韻を踏むような美事な石組の味、石組によるたぐみな空間処理は西芳寺の洪隠山の石組にはまったく感ぜられない。ここの石組は大きな石を、ただ無感覚に並べていつた、そんな感じを受ける。天竜寺池中の石組にみられる知的な感じは、まったく感じられない。これにより、私には天竜寺曹源池中の石組を国師の作とすれば、西芳寺洪隠山の石組とはその感覚の相異から、同一の作者、すなわち夢窓国師の作とは考えられないのである。

西村貞氏は『庭と茶室』に

天竜寺の曹源池畔にある竜門の滝は、国師晩年の作にかかるもので、西芳寺洪隠山中腹の枯滝の石組がさらに展開して、その発達した頂点に達したものとみて差支えあるまい。この枯滝組附近の石組は、まったく天下の奇絶と称するものなお賞めたりない出来栄を示すものである。

と述べておられるが、私には洪隠山の石組の作者が、曹源池の石組の持つ美事な味を十年位の年月では持ちえなと思うのである。

文献による考察

以上、視覚的な立場から西芳寺洪隠山の石組の作者について述べたがここでさらに文献によつて考えてみた

い。

西芳寺洪隠山の石組を夢窓国師の作とするのは、池庭が国師の作とし、したがつて洪隠山中腹の石組も国師の作と云うのであるが、この石組を国師の作と云う文献は見当たらない。さらに、『国師年譜』『西芳寺記』『蔭涼軒日録』『看聞日記』等にも、庭のようすや局部についてはかなり詳細に記るされているのに、この洪隠山石組についてはなにも記るされていない。

『国師年譜』に

於山之後絶頂。設亭曰縮遠。其所入門向上關剪。榛開。徑爲四十九院盤。而登危磴。曲折之間。苔滑雲枯。草木陰森未。到半山。別卓小庵。扁曰指東。

と見える。国師は西芳寺の後山洪隠山頂に縮遠亭と云う亭を建て、向上関と云う門を作り、その入口とした。山の中ばに指東庵と云う庵を作つた。この向上関は『築山庭造伝』前編に記るされている図によると、現在の場所と思えるところにあり、指東庵もやはり現在の開山堂の所であろう、枯山水石組も同様で指東庵の東側にある。この文献にも、向上関から縮遠亭まで記るされているのに、指東庵のすぐ横の枯山水については一言もふれていない。

さらに『蔭涼軒日録』に

寛正五年九月二日

指東庵。縮遠亭御遊覧。山路險阻。雖攀而倦。滯仰。御一笑。

とあり、縮遠亭に登り、指東庵で休んでおられるのに、枯山水石組についてはふれていない。又『京華日工集』に

准三后相。攸東山。大開。新府。斫青山。導白水。五步一樓。十步一閣。絶頂構亭。山畔築庵。皆象西芳舊製。

とあり、慈照寺(銀閣寺)庭園は西芳寺庭園を模した、この絶頂に亭を構えと云うのは縮遠亭であり、山畔に庵を築きと云うのは指東庵を模したのであろうが、この文献も指東庵横の枯山水にはふれていない。

これについて、森蒔氏は『日本の庭園』(創元社)に

また庭園建築が東山殿に模倣されたとしても背後の石組までそつくり模写するに至っていないところを見ると、この石組を模倣したくても、それほど達者に石を組むことのできる技術者は既にいなかったであろう。

と云われるのも、この『京華集』に「絶頂構亭。山畔築庵」とあるのに、枯山水についての記事が見えないから、技術者がいなかったと考えられたのであろうが、この枯山水石組は、さほど高級な技術を必要としなくとも組める石組であり、慈照寺にも、他の京都の庭園にも、この石組よりすぐれたものは多数見られる。義堂周信も

縮遠亭に登り『空華日工集』に

登。縮遠亭。更。高。上。如。下。坂。勇。登。到。頂。縮。遠。二。字。宛。爾。九。重。城。之。南。北。燦。然。如。圖。畫。中。物。

とあり、これも石組についてはふれていない。このように、洪隠山の石組が文献に見られないのは、当時この石組がまったく一見の価値もなかったか、或は作られていなかったかどちらかであろう。この洪隠山の石組が夢窓国師の作であり、水を用いず滝を表した特殊なものであれば、これらの文献の中に何か記るされ、当然東山殿にも模されたであろう。特に現在の庭園史が評価しているような優れた、特色ある石組であれば、なおさらであろう。

『築山庭造伝』前編に、西芳寺庭園のスケッチがあり、この画の中に、洪隠山の石組が画かれてあり、そこに

この庭ばかりは染殿地藏の作

と記され、池庭の部分には

夢窓国師の作

とある。この染殿地藏の作と云うことについて、西村貞氏は『庭と茶室』に

すなわち京四条京極の染殿地藏尊がつくつたと云う伝説をあげ、国師の作庭と区別しているが、これは江戸初期のころよりあらわれた伝説で、つまり天竜寺の嵯峨流（夢窓国師流）に対して、四条流すなわち、四条住心院染殿地藏流とは別流であるとする公郷及至仁和寺系真言僧一派の伝をひくものが、国師の作風とは別流であるとして、国師を多少うとんじて為にせんとするひがごとくに胚胎するものである。

と述べておられるが、私には、この『築山庭造伝』のわずか一行の記事が庭師のお家あらそいを現しているとは思えない。

とにかく洪隠山の石組が最初に現れたのはこの記事である。

西芳寺は、たびたびの台風水害に会つてこわれ、今は昔日の面影もしのびがたいが、洪隠山の石組は水害によつてこわれた、縮遠亭の道を或庭師が修理した、その時、水害で流れ出た石をここに組んだ、しかしこの庭は天下の名僧、夢窓国師の作と云われて中国朝鮮にまできえた名苑であれば、そこに名もない庭師の作となる石組にその名を記す事は出来ない、そこで『庭造伝』の著者は或この石組を染殿地藏の作としたのではなかろうか、は伝説の根もこんなところにあるのではなかろうか、いずれにせよ、江戸時代に著された書物に初めて現われ、それ以前の文献に見られないのは『庭造伝』の著されたのとそう時代を異にしない頃この石組が作られたのではなかろうか。

実物による考察

この洪隠山の石組を見ると、手前の石組（3図）は石の根の根元の土が二十糎ばかり流されているのに、下の池庭の石組は、水害によりこわれかつての石組の様をしのぶ事すら出来ない。洪隠山の石組が夢窓国師により室町時代に作られているとしたら、石組の根元の土を二十糎ばかり流されただけで残ると云うことは、考えられない。これが室町時代に作られていれば、池庭の石組と同じ位毀れているべきではなかろうか。それがこのような形で残っていることは、池庭の石組とかなり時代を異にして組まれたと考えることが出来る。

さらにこの石組をこまかく見ても、大量の水と土の流れた痕跡も見られず、倒れた石、水をかぶつた石も見当らない、きわめて良い状態である。これによつてもこの洪隠山の石組は池庭と、その作くられた時代を異にしているのではなかろうかと考えるのである。

結 語

以上私は西芳寺洪隠山の作者、作庭年代を

一、視覚的

二、文 献

三、実物の調査

によつて考察してみた。

視覚的な立場からの考察は、天龍寺池中及びその附近の石組と、西芳寺洪隠山の石組とは作者の技倆及び感覚の相違から、両者を同一作者と考えられず、天龍寺のそれを夢窓国師の作とすれば、西芳寺のものは、国師とする事が出来ない。

西芳寺庭園についての主な文献は、『夢窓国師年譜』『西芳寺記』『蔭涼軒日録』であるが、そのいずれもこれ等以外の文献にも、洪隠山の石組を夢窓国師の作と云う記事はおろか、この石組についても全くふれていない。しかるに『築山庭造伝』前編に洪隠山の石組を、染殿地藏の作とする記事が現われ、これにより室町時代にはこの石組は存在せず『築山庭造伝』の著される以前に組まれたのではなかろうか、西芳寺はたびたび水害に会い、池庭の石組はことごとく埋没し、或は流されてこわれてしまつていのに、洪隠山の石組は、僅かに土を流されているに過ぎず、水や土砂の流れから何等の損傷を受けていない。これによつてもこの石組は比較的新しいものであり、室町時代に、夢窓国師によつて組まれたと云うより、江戸時代に組まれたと考える事が出来る。

これらを総合すると、西芳寺洪隠山の石組は室町時代、夢窓国師により作られたのではなく、江戸時代に一庭師によつて組まれたと云う結論を得る事が可能である。

森蘊氏は『平安時代庭園の研究』に

枯山水といえば、今日の学界の通説としては、築山林泉に対するもので、吉野時代頃に於て夢窓国師により創始せられ室町時代に到つて完成し、この時代を風靡流行せる様式で、その代表作が西芳寺庭園、龍安寺方丈庭園及大徳寺塔頭大仙院などであるという事になつて居る。

と述べておられるが、私はこの洪隠山の石組は、夢窓国師によつて創始された枯山水ではなく、大仙院、龍安寺等の庭園とは、全く別なものであるとするのである。

大仙院、龍安寺によつて代表される枯山水庭園は、この洪隠山の石組とは別な理由により発生したものと考へている。

さらにこの石組がはたして枯澗を表すかどうか疑問である。

以上

Summary

The design of stones in the Karesansui garden

at Koin-zan, Saiho-ji, Kyoto, has been attributed to the hand of the master priest, Muso-kokushi.

However, when it is compared with another garden at Tenryu-ji, which is also attributed to the work of Muso-kokushi, there are observed marked differences in workmanship and others. Moreover, literature such as 'Saiho-ji Engi' or the historical origin of Saiho-ji temple has no reference to this at all. Another piece of gardening literature composed in the Yedo era, Chiku-zan teizoden (Essay on garden and hill designing), ascribes this to the authorship of Ryuden-jizo. These evidences lend support to a supposition that this part of the said garden may have been constructed by some other hand than Muso-kokushi. The writer is inclined to believe that the stone design at Saiho-ji temple was not constructed by Muso-kokushi, but by some one else, possibly a gardener in the Yedo era.

第一図

第二図

第三図